

どということが、とても現実のこととは思えなくなる」というのは、瓜生卓造氏の名言である。山の高さがそうさせるのか、あるいは山の空気がそうさせるのか、とにかく、山には下界の俗臭を取り去るだけの不思議な力がある。それがまた老若の登山家を山に惹きつけるものなのだろう。瓜生氏のこの言葉は、山の持つそうした魅力をも、不思議に生々しい実感で言い表わし得て妙である。だがそのためにまた、山岳小説というものが、結局は、友情と誠実だけを謳歌する単調さに陥ることになる。

また山のそういう魅力を利用して、登山をひとつのスポーツとして考えた場合、やはりきびしい純粹さと誠実とを前提にしなければ、登山がスポーツとして成立し得ない不可欠の条件がある。つまり、登山というスポーツには観衆も記録員もいないということである。証人が誰もいないということだ。これが他のスポーツと登山との決定的な相違であるといってよからう。たとえば、私たちが人っ子ひとりいないフィールドで、たったひとりハイ・ジャンプに二メートル五〇を跳んでも、三段跳びに二〇メートル跳んでも誰も信用しないし、仮に信用してくれたとしても、それは通用しない。たとえそれがいかに正規のフィールドで、いかに正確に測っていても通用しない。どうしてか。証人がいないからである。確証がないからである。ところが登山だけは違う。山登りには観衆もいなければ記録員もいない。元来が人里はなれた孤独なス

p235

ポーツである。どここの山に登ってきた、あるいはどここの岩壁に初登頂してきたと言われれば、無条件にそれを信用するしかない。したがってまた、登る方に対しても、それを聞く方に対しても、フェアな態度が大前提として要求されるのである。登ったものも絶対に嘘はつかない、またそれを聞く方も絶対に疑わないという、きびしい紳士協定が厳格に守られて始めて登山というスポーツは成立する。

「山には悪人はいない」ということがよく言われる。事実その通りなので、そこには何の誇張もない。山にそうさせるだけの何かがあると同時に、そうなくてはそもそも登山というスポーツが成立しない事情もあるわけである。この意味では登山は文字通り「君子のスポーツ」だということができよう。したがって山岳小説というものが、結局は善男善女ばかり出てきて、友情と誠実を高らかに謳歌するというマンネリズムから脱しようがないというのも、結局は山岳小説の持つ宿命みたいなものである。

山に嘘つきやみえっぱりはいないかという最初の私の質問も、結局は、登山というスポーツに対する私の認識不足を暴露したということ引き下らざるを得なかったわけである。

虚栄の山

だがその後、ヘルマン・ブルーのナンガバルバート登頂の記録を読んだ時、私は待

山のこころ

福田宏年



三年前の遭難の時、半年経った夏に氷が融けて発見されたH君の遺体を座棺に収め、飛驒側の麓の部落で荼毘に付した。村の焼き場は谷合いの畠のなかにあり、それはまさしく火葬場ではなく焼き場であった。私の郷里にも、煉瓦を積み上げただけの廢墟に似た焼き場があった。夕暮れ時、H君のお母さんと、黙々と薪をくべ、襲いかかってくる蕨蚊を追いやりながら、遺骸が焼けるのをただ待った。H君への悲しみと融け合って、私のまわりの空気は濃くなっていった。子供の頃、祖父が死んだ時、死後しばらくは魂が家の軒を去らないというのを聞いて、夜は怖くて外に出られなかった覚えがある。しかし、その時、飛驒の谷合いで、H君の霊が人魂となって夕闇の空間に漂っても、私は驚かなかつたかもしれない。

ティッヒーの「雲烟の志」とまでは行かないが、今も、私は時おり山里を歩く。茅葺きの納屋の蔭からつましく梅の枝がのぞいていたりすると、私のまわりの空気は微妙に揺れ動き始める。それはなつかしさと同時に、例のゾツとした感覚を伴っている。その上、堆肥の匂いでも混っていれば、もう申し分ない。

虚栄の山

いつかある登山家に、「頂上を極めないのに登頂したと偽って、後でその嘘がばれてしまったという例はありませんか」と訊ねたことがある。その時の答えは、大きい山や岩壁の初登頂でまだそんな話は聞かないということだった。なぜそんな質問をしたかという、その時私は、山岳小説の可能性ということを考えていたわけである。もしある登山家が偽って初登頂を宣言し、後でその嘘が薄紙をはがすように徐々にあはかれて行くなら、その登山家の動揺する心理を辿って、そこに最も小説的な山岳小説が成立するのではないかと考えたわけである。

山岳小説のむずかしさは、元来が山にはドラマが存在しないということにある。結局は苦勞して登って降りたということ以外に、そこにはなんら人間関係の葛藤がない。利害関係や疑惑や嫉妬や虚栄などの人間臭いもので彩られた下界のドラマが、山にはまったく見当らないことである。「槍の頂上に立つと、はるか下界の雲の彼方のそのまた先に東京があり、銀座があり、そこでこの俺がなにがしの女の子と酒を飲んだ

どということが、とても現実のこととは思えなくなる」というのは、瓜生卓造氏の名言である。山の高さがそうさせるのか、あるいは山の空気がそうさせるのか、とにかく、山には下界の俗臭を取り去るだけの不思議な力がある。それがまた老若の登山家を山に惹きつけるものなのだろう。瓜生氏のこの言葉は、山の持つそうした魅力をも、不思議に生々しい実感で言い表わし得て妙である。だがそのためにまた、山岳小説というものが、結局は、友情と誠実だけを謳歌する単調さに陥ることになる。

また山のそういう魅力を別にして、登山をひとつのスポーツとして考えた場合、やはりきびしい純粋さと誠実とを前提にしなければ、登山がスポーツとして成立し得ない不可欠の条件がある。つまり、登山というスポーツには観衆も記録員もないということがある。証人が誰もいないということだ。これが他のスポーツと登山との決定的な相違であるといつてよからう。たとえば、私たちが人っ子ひとりいないフィールドで、たったひとりでハイ・ジャンプに二メートル五〇を跳んでも、三段跳びに二〇メートル跳んでも誰も信用しないし、仮に信用してくれたとしても、それは通用しない。たとえそれがいかに正規のフィールドで、いかに正確に測っていても通用しない。どうしてか。証人がいないからである。確証がないからである。ところが登山だけは違う。山登りには観衆もいなければ記録員もない。元来が人里はなれた孤独なス

ポーツである。どここの山に登ってきた、あるいはどここの岩壁に初登頂してきたと言われれば、無条件にそれを信用するしかない。したがってまた、登る方に対しても、それを聞く方に対しても、フェアな態度が大前提として要求されるのである。登ったものも絶対に嘘はつかない、またそれを聞く方も絶対に疑わないという、きびしい紳士協定が厳格に守られて始めて登山というスポーツは成立する。

「山には悪人はいない」ということがよく言われる。事実その通りなので、そこには何の誇張もない。山にそうさせるだけの何かがあると同時に、そうなくてはそもそも登山というスポーツが成立しない事情もあるわけである。この意味では登山は文字通り「君子のスポーツ」だということができよう。したがって山岳小説というものが、結局は善男善女ばかり出てきて、友情と誠実を高らかに謳歌するというマンネリズムから脱しようがないというのも、結局は山岳小説の持つ宿命みたいなものである。

山に嘘つきやみえっぱりはいないかという最初の私の質問も、結局は、登山というスポーツに対する私の認識不足を暴露したということ引き下らざるを得なかったわけである。

だがその後、ヘルマン・プールのナンガバルバート登頂の記録を読んだ時、私は待

てよ、と思った。というのは、決してブルが、ナンガバルバート登頂を果したことに疑問を抱いたわけではない。ブルはナンガバルバードの頂上で、ピッケルにオーストリアとチロルの旗をつけた有名な写真を撮っている。問題はその写真を専門の学者が種々検討して、登頂に偽りなしという折紙をつけたことである。この検討に対して、私は何か釈然としないものを感じたのを、今でもはっきり覚えていいる。「嘘をつかず、また疑わず」という不文律が暗黙のうちに確乎として存在するのだったら、どうしてこのような検討が必要なのだろう。それは登山というスポーツの純粋性を自らがすくことではないか。もし仮に、人あってひそかに検討して、間違いなしという結果が出たとしたら、かえっておのれの猜疑心を恥じて、ひたすら沈黙を守っているべきはずのものではないか。ただしも写真があったからよいが、写真がない場合はどうするのだろうか。確証がない場合はどうするのだろうか。疑惑を抱いたまま表面だけ信じた振りをしようというのだろうか。だが、そのための紳士協約ではなかったのだろうか。検討などと、つまりは登山というスポーツの拠って以って立つ基盤を自ら崩しかかっているようなものではないか——といったような気持であった。

だが一面、また正直いって「登山家は善人だ善人だといいながら、結局山屋も人間じ

ゃないか」という、一種の安堵感を伴った「ざま見ろ」の気持を覚えたことも事実だ。写真を検討するということは、結局、皆一様に疑惑を感じるということであり、ということさらには言え、誰しも嘘をつきかねないということである。山に行こうが里にうごめいていようが、結局人間は人間であり、権力欲、名誉欲という、人間のシッポはどこまでもつきまとうものである。登山家という、清廉潔白な特殊な人種が存在するわけではない。世に登山家というタイプの一番嫌味なところは、こういう名誉欲とか権力欲とかいう、人間の最も根本的な衝動に強いて眼をつむろうとする点である。私たちが山に登るのは、もちろんマロリーの言ったように「山がそこにあるから登る」のではあろうが、同時にまた名誉欲、権力欲にうながされてのことだということも否定し得ないことである。そして、これを認めることは、決して登山の精神をけがすことではない。むしろ天皇の「人間宣言」にも似た、登山家の「人間宣言」である。これがあるからこそ、「嘘をつかず、疑わず」ということが、ルールとして生きてくるし、重みを持つてくるとも言えるわけだ。

最近、ある登山家が鹿島槍の未踏の岩壁を登ったことについて、それが嘘か否かということが話題になっている。この話を耳にした時の気持は、ちょうどナンガバルバート写真判定の話を読んだ時の気持に通じる。そして同時に、はなはだ不謹慎かもし

れないが、とっさに考えたことは、「これは小説ダネだ」ということであつた。ということとはつまり、とかくドラマがないと言われている山に、人間のシッポを見つけたということもある。そしてまた、これが登山の本質ということをやテーマにして小説をものにする場合の恰好な材料ではないかということでもある。

元来がフェアプレイという唯一の条件の上に立つスポーツが登山なのだから、登りもしない岩壁を登つたと嘘をついたとすれば、余人は知らず、登山家の間では、これは確かに一大衝撃にも似たニュースであろう。もしこの登山家が嘘をついたことが事実とすれば、私たちに反撥を覚えさせるものは、その不誠実であり、虚栄心である。だが、ここで敢えて異を立てるわけではないが、不誠実はともかく、この「山上の虚栄」を虚栄心の故に責める気には私にはなれない。

「虚栄は、美德の全部を覆さないまでもそのすべてをぐらつかせる」

「美德は、もし虚栄の道づれがなかったら、これほど遠くまで乗り出すはずがない」

「偉人英傑なるものは、大きな虚栄を取りのけにすると、普通一般と同じ人間である」

これらの言葉は、フランスのラ・ロシュフコウの「箴言録」から引用したものである。ラ・ロシュフコウの「箴言録」は機智と皮肉をもって鳴るものだが、私はここでこれに便乗して、敢えて皮肉めかした態度を取ろうというでもない。虚栄心というものは、人間の宿命的なシッポのようなもので、虚栄心があるということは人間であるというようなものである。早い話が、電気冷蔵庫がありもしないのにあるような顔をする奥さんに対して、私たちは、困ったものだが仕方がないといった、処置なしの感を抱く。それが登山家の場合には、どうしてこうも問題になるのだろうか。

いやむしろ、虚栄心というものを、心理的な背のびだと定義してみれば、虚栄心というものが実は文明や文化を発達させてきた、人間の最も根本的な衝動だとさえ言うことができる。

人間のエゴティズム（自己主張癖）というものは、外に現われた場合、必然的に虚栄というポーズを取るものなのだろう。またラ・ロシュフコウで恐縮だが、こんな言葉もある。

「われわれが他人の虚栄を堪らなく思うのは、それがわれわれの虚栄を復つけるからだ」

断っておくが、私はここで決して問題の鹿島槍の登山家を弁護するつもりはない。この問題は決して一登山家の嘘か否かの問題でなく、「登山家善人説」という心理的オナニズムに耽っていた登山界の病弊が、ひとつの具体的な割れ目として露出したものである、と言うことができよう。これを機会に、人間臭さもふまえた上での登山の本質、あるいは登山のルールというものを考えてみるべきではないかと思うわけである。登山家という特別な人種があるわけではない。どこへ行こうと、我欲と名誉欲というシッポを持った人間であることに変わりはない。

だがもう一度言えば、これは決して問題の登山家の弁護ではない。この場合問題になるのは虚栄心ではなく、ただルールを破ったということである。それも唯一の根本的ルールである。かようなルールを破った登山家にすでにスポーツマンの資格がないことは論をまたぬ。そして、名誉欲を認めればこそ、このルールの重みが増すのである。

最後にもう一言つけ加えれば、人間誰しも生活や利害からんだ嘘は許しやすいものである。だが趣味からんだ嘘は、これは一番許し難い。

山岳部長の思い出

昭和三十六年の夏休が明けた頃だったと思う、私は同僚の石島渉教授から呼ばれた。石島教授は地質学が専攻で、私と専門は違うが、親子ほども歳が違ふこの先輩教授と私はよく飲み歩いていた。したがって、石島教授から、「自分の後をうけて山岳部長をやってくれないか」と言われるまで、石島教授が山岳部長だということも忘れてしまっていた。その頃、私は立教大学に勤めて、五、六年になっていたが、山岳部長はおろか、運動部の部長をやるなどということは夢にも考えたことはなかった。いかにも石島教授の言う通り、私はドイツ語の山岳書を二、三訳してはいたが、年に何度か山の麓をうろつく程度で、山岳部長を勤めるほどの登山の知識があるわけではない。だが、登山家でなくても山岳部長は勤まる、という石島教授の言葉に押し切られた形で、なんとなく引き受けることになってしまった。

始めて石島教授と一緒に、穴倉のような山岳部の部室を訪れた時のことは今もよく覚えている。そこで私は石島教授によって、部員たちに新部長として紹介されたが、